

22. 上藻八号沢の開拓

近藤 軍之助

※明治20年10月10日生、大正3年2月常呂から転住。

入殖の動機

私は明治42年に、常呂村16号に入地した。此所は地味が良く、作物もよく出来たが、現在のように常呂川の護岸ができておらず、年に2回も水害に遭う有様で、折角刈り取った作物が、畑に積んだまま流れて行くのを見守るばかりだった。

これではとても農業はできないと、此所の土地を締め、支庁に知人が居たので、これに頼んで調べてもらったところ、上藻八号沢の特定地開放を知って、入地することに決定した。

現地へ状況を見に入ったのは、大正2年10月で、同行した人たちと、12号の垣谷さん方に、野宿同様にして一泊した。

その時、8号附近に入る予定で、下見に来た人達がいる、「とてもあんなひどい所には入れない」と言っていたが、この人たちは、後になっても入殖しなかったので、出願したまま放棄したものであろう。

私は、この下検分の時に、12号に居た木村（岩吉）と言う人に、着手小屋を15円で建ててもらおうようお願いし、半金を渡して引揚げた。

上藻8号沢への往復は、忍格子から山越えして12号へ出る道（後の五六峠）で、途中で入殖者らしい人に出逢ったので、話を聞くと、滝（常二郎）と言う人の長男（清三）でいま入殖したばかりで、興部まで行って、鍋などの家財道具を買っての帰りだと言うことであつた。

なおも詳しく話合うと、滝さんは8号沢入口より少し下（尾崎敬正附近か）に入つたと言うことなので、明年からお世話になるので、よろしくお願ひすると別れたが、後年滝さんと親しく付き合うようになった。

八号の入殖者

8号沢の、初めての入殖者は、兄岩太郎に私、塩見松次、石山吉雄、井上慶助の5戸で、大正3年2月10日に入地し、私が数え年で28才の時である。

常呂から馬櫓で入ったが道が悪く、荷物は2回に分けて運び、忍路子の五六峠を越える道順だったが、この頃の五六峠は刈り分け道で、冬だから漸く馬櫓が通れるという酷い道で、女子供は馬櫓を下りて歩いたものだ。

8号沢に入ると、前年私が頼んでいた着手小屋は出来ていたが、雪が一杯で、これをかき出して入居した。この家に同行者全員が寝泊りするので狭く、家財道具は外に積んで松葉をかぶせ、馬も秋まで小屋なしで、外に繋ぎばなしでおいた。

8号沢の古い入殖者には私たち5戸の外に、順序ははっきりしないが、2、3カ月遅れて鈴木市五郎が入殖し、近藤求太郎（子、健司）は大正4年ころ、近藤秀雄の父（時光）は、大正6年12月に入地している。

その他では、横関治平、秋山宗一、谷口権助、西条千賀蔵、角力山豊治、佐々木光太、岩瀬哲太郎、菅野三之助、菅野勝十郎、迫田喜三郎等が居る。

開拓と木材師

その頃の開拓の一番の苦勞は、生い繁る大木の処理で、どうやって伐採して片付けるかが、大仕事だった。私たちの入殖した時に、小林弥三郎（六興橋附近）、森美治（三浦事務所附近）向井伊三郎（六興田尾陸夫附近）の3人が、三和木材というのを組織して、盛んに開拓地の木材を伐り出していたが、センやシコロや青木類の軽いものばかりで、ナラ、アカダモなどの水に沈む木は、積んで焼き捨てるだけだった。

三和木材は一年くらいで解散し、向井は名寄に引き揚げ、小林、森は、その後も個人で造材を続けていた。

邪魔物扱いの大木は、造材師に「ただ」同様に買上げられたが、開拓者は、邪鹿な木は伐ってもらい、しかも何がしかの金になって喜んだが、今になって考えると、惜しいことをしたものだと思う。

それでも安い価格で買った木材は流送して、興部の沖合いで、積取船に積込んで幾らという取り極めだったらしく、地もとの木材師は、余り良い儲けにはならなかったようだ。

そのほかに、興部の米田千松が、8号沢を中心に、センの木を主として造材しており、帳場には、札滑の阿部鉄治が、馬搬には、奥興部の合田清七さん兄弟等がやっていた。

澱粉と水田

8号沢では、何年頃か忘れたが、横関治平、菅野勝十郎の二人が前後して、澱粉工場を操業したのが最初で、私はずっと遅れて昭和8年に、8号沢の殖民道路が完成した年に、横関さんに勧められて始めたのである。

大正12年に、奥興部に土功組合ができ、上藻方面でも試作して、収種できることが分かったので、昭和4年に、5号沢（現遠藤哲雄）から水を揚げ、現在の会館と遠藤さんの間に、2町2反歩ほど造田した。そのころ大分畑も買って、耕地が多くなっていたので、小作に作らせる計画だった。

反収5俵位の計算で、年具米反1俵にしても、22俵位入るから、自家飯米にはこと欠かない心算だったが、あに計らんや、来る年も、来る年も、満足な稲藁もとれない凶作続きで、遂に昭和10年ころ、畑に還元してしまった。

開拓当時の郵便

開拓当時は、来る日も来る日も、手に余る大木と取り組んだり、焼き払った跡を、顔も手もススで真黒になっての種蒔きや、開墾に明け暮れていて、楽しみは雨の日に川魚をとる位だったから、故郷からの便りは、本当に嬉しく、女子供は毎日の辛さと、故郷恋しさに、手紙を手にして涙をこぼしたりしていたものだ。

しかしこの頃の配達は、上興部に局ができてから、上藻方面の郵便物は、六興の古川商店（青木喜市附近）に止め置かれ、各自が都合の良い時に受領に行くことになっていた。

これでは一畝でも余計に開墾しようとする開拓者には、耐えられないので、新田さん近くに入籍していた、石川儀平という人の息子（長太郎）に、地域の人が金を出し合っ

て配達を頼んだが、まだ15、6才だったが、体の大きな子供だった。
開拓時は、郵便物一つ受取るにも、こんな苦勞をしなければならなかった。